

る発言さえも孫光憲には許されていたのであった。

齊己の場合もまた趨奉を免ぜられるという特典を王よりうけていた。齊己も「渚宮莫問一十五首并序」(『白蓮集』巻五) 中において

余不覺欣然而作。顧謂形影曰。爾本青山一衲。白石孤禪。今王侯構室安之。給俸食之。使之樂然。萬事都外游息自得。則雲泉猿鳥。不必爲狎。其放縱若是。夫何繫乎。

と素直に喜びを表現している。

しかしながら、こういった扱いを受けてもなお、三者の心中に生じた荆南高氏にたいする不信任感をぬぐい去ることはできなかったのである。なぜならば、高氏一族に対する不信任のおくには三者が共通して抱えている不満があったからである。

彼らの不満の原因を示しているのが、『十國春秋』巻一〇二に記載される、

光憲素以文學自負。處荆南。怏怏不得志。常慕史氏之作。頗恨居諸侯幕府。不足展其才力。每謂知交曰。寧知獲麟之筆。

反爲倚馬之用。

という部分である。ここで孫光憲がいうように、諸侯の幕府程度では自らの文学の才能を発揮することはできないというような考えが常に頭の中に存在したのである。それゆえに、孫光憲は齊己の詩集『白蓮集』序に中唐以来の詩僧について説き、齊己をその流れの中に位置づけるのである。

結局のところ、この三人は形の上では荆南高氏に仕えてはいたが、自らの意識としてはあくまでも「唐人」であり続けたのである、そのことにより深い関係を持つにいたったのである。

境界なき世界の中で

——イアン・マキューアンの『黒い犬』における悪の遍在——

松宮 園子

一九九二年に出版されたイアン・マキューアンの『黒い犬』は、ある女性の人生の転機となった四十三年前の出来事を軸に展開する。第二次大戦終結直後のフランスの片田舎を新婚旅行中の若い英国人女性ジューンは、夫とはぐれた山道で二匹の巨大な黒い犬と出会う。これを「悪」との遭遇と見なした彼女は、その後神秘主義に傾倒し、社会改革と合理主義を信奉する夫バーナードとの結婚生活は破綻をきたす。小説は、この夫婦の娘と結婚し幸せな家庭生活を送るジュレミーによる、義母ジューンの「メモワール」として提示されるが、その形式は一般的な伝記とは大きく異なっている。第一章では、今は老人ホームで死を待つジューンに対する、ジュレミーによる最後のインタビューの様子が語られる。第二章ではジューンの死から二年後、壁が崩壊した直後のベルリンに飛んだジュレミーとバーナードの小旅行が、続く第三章ではベルリンでの短い滞在を終え、過去の事件の舞台であるフランスの田舎を再訪したジュレミー自身の体験が述べられる。そして最終章で時は遡り、四十三年前の出来事がジュレミーによって読者の前に初めてつぶさに再現されるのである。この章構成から明らかなように、ジュレミーの「メモワール」の主題はジューンの生涯というよりも、むしろ伝記執筆を志す彼自身であると言える。

彼はジューンの伝記作家となるまでの自らの葛藤をも「メモワール」に組み込むことで、「語る者」としての領域に留まることを拒否し、「語られる者」ジューンと立場を同じくしようと努める。そして彼の語り内に在する曖昧さは、彼が遂に「語る者」の領域に退き、伝記作家としてジューンの過去を語る最終章においても、「語る者」と「語られる者」の間の境界を侵食せずにはおかないのである。

ジューンと黒い犬との遭遇の具体的な成り行きに謎はない。二十五歳のジューンは二匹の巨大な犬に襲われるが、危ういところでペンナイフで撃退し難を逃れたのである。しかしジューンはその直後村長から、その犬が人間をレイプするように訓練されたゲシュタポの犬の生き残りであると聞き、強い衝撃を受ける。しかしホテルの女主人は村長の作り話であると否定し、かつてゲシュタポに辱められたある女性を村人たちがその悪意ある噂で更に苦しめたと非難する。小説中に見られる他の数多くのエピソードと同様に、この問題に関しても真相を知ることはできない。それを如何に解釈するか、如何に語るかは個人の選択なのである。それまでの章で年老いたジューンの神秘主義に対する不信を露わにしていたジェレミーは、第四章では「全知の」語り手と化し、ジューンの意識をそのまま再現することに努める。しかし、巨大な犬の前に進退極まったジューンが不意に自らの中に「神」の存在を認める場面では、「彼女が後から試みた説明によれば」というコメントを挟むことで彼女から距離を置かずにはいられない。しかしメモワールの結末でその距離は突然消滅する。彼はジューンがしばしば襲われた夢想を説明するが、*Time told me* で始まりジューンの夢を伝えていたはずの語りは、結びの思いがけない

『E』の使用によって、ジューンとジェレミーの意識の混合物となる。ジェレミーは語る、「黒い犬は戻ってくるだろう。ヨーロッパのどこかで、いつの時代にか僕たち（E's）を捕らえるために」。結末でのこの二人の融合について、彼がジューンの解釈を自分のものとして選んだのだと、つまりは自分自身の解釈に到達したのだと言うことはできない。なぜなら彼は対抗勢力としての神の存在については何の理解も示さないまま、ジューンの悪のヴィジョンに飲み込まれたに過ぎないからである。しかしジェレミーとジューン、過去と現在、語られる者と語る者が溶け合うこの境界なき世界は、語り手の弱さを示すというよりはむしろ、作者が提示する小説のテーマそのものであると考えられる。

第三章までで描かれるジェレミーの生い立ち、そして現在の彼がイギリス、ドイツ、フランスで経験するあらゆる出来事が示すのは、最も正反対であるべき二者、すなわち加害者と被害者の境界すら決して明らかではない、という不気味な認識である。早くに両親を亡くしたジェレミーは、親代わりとされて接してきた幼い姪サリーを自ら捨て去ることで「見捨てられた者」から「見捨てられる者」への移行を余儀なくされる。不幸な連鎖は終わらず、両親から虐待を受け続けたサリーは、やがて不幸な結婚をし、自らの子供に暴力を振るった末に養育権を奪われることとなる。第二章で描かれるベルリンの壁崩壊という歴史的事件も、共産主義からの解放という楽天的な視点からは捉えられない。お祭り騒ぎのベルリンの街に蠢く悪や差別を一つのシステムに帰することは不可能であり、それらの悪は壁なき世界に蔓延していくのである。同様に、ジェレミーと妻ジェニーが初めて出会うポーランドのエピソードが示すように、究極の悪の象徴として小説全体を覆うホ

ロコーストの悪夢は、歴史の中に留まることなく現代社会の様々な断面を侵食している。ジェレミーの不安はその被害者になると同時に、自らも加害者になるのではないかと恐れである。この二面性が最も顕著に示されるのが、第三章での彼の乱闘である。ホテルのレストランで屈強な父親が幼い息子に暴力を振るうのを目撃した彼は、自らの不幸な子供時代を重ね合わせ、激憤に駆られて父親を殴り倒す。いつもの中立的立場を捨て去り、ジェレミーはこの事件を自らの過去の「清め」であり「復讐」であるとして力強く主張するものの、ここでも悪の境界は定かではない。男と殺しかねなかったジェレミーを我に帰らせたのは、そこに居合わせたフランス人女性の言葉「もうやめて (‘Ca suffit)’」であった。それは四十三年前、ジェーンが自分に飛びかかろうとする黒い犬に向かって叫んだ正にその言葉である。こうしてジェレミーの行為は黒い犬と結び付けられ、彼は黒い犬が象徴する暴力を自分の中に見出すのである。黒い犬の悪が自分自身を侵食していることに気づいたジェレミーに境界を保つ力はなく、彼は伝記の結末においてジェーンのヴィジョンが自らの語りを支配するに任せるのである。

黒い犬の最も恐ろしい点は、その悪を特定できないという事実である。ゲシユタポ、村人の悪意ある噂、非人間界の獣の敵意、そしてこの平和なフランスの片田舎に発信機を持ちこむ連合軍の軍事作戦に間接的ながら加担していたジェーンとバーナードの二人にさえも、悪を見出すことは可能なのである。更には、二匹の飢えた黒い犬がジェーンに牙をむき、攻撃態勢を取っていたのは確かであったとしても、ペンナイフを手に初めに突進したのはジェーンであること、ナイフが突き刺さった瞬間、巨大な黒い犬がまるで

子犬のような「哀れな鳴き声」を立てたことは、ジェレミーと父親の乱闘と同様に、果たして加害者はどちらなのかという点すら曖昧なものとす。序章でジェレミーが解釈を拒んだこの事件は、その曖昧の度を更に深めて読者へと伝達される。そして境界の消滅、悪の遍在という小説のテーマは、「語られる者」ジェーンに、そして黒い犬の悪に侵食される語り手ジェレミーによって体現され、増幅されているのである。

ダイケンズ『骨董屋』における ゴシックとグロテスク

甲斐清高

十九世紀英国において、中世という時代に対する意識は非常に雑然としたものであった。十八世紀半ばから十九世紀後半にかけて、英国ではゴシック・リバイバルと呼ばれる現象があったが、そこには中世に対する雑多な意識が反映されている。ゴシック・リバイバルは主に建築に関して見られた動向であるが、中世を連想させるものに対する指向全体を指して考えられることが多い。当初のゴシック趣味の根底には、中世封建制時代への憧れと、ピクチュアレスクの美学に基づく廃墟への関心があった。古典主義への反発とも取られるゴシック復興の流行は、奔放な、そして不健全なまでの想像力を解き放ち、さらに、その非現実的側面はグロテスクなものへと近づいていった。これは当時のゴシック・ロマンスの流行と密接な関係をもっていると考えられる。しかし、建築家 A・W・N・ピュージンに代表されるようなヴィクトリア